

中国古代瓦当

－西周・戦国・秦・漢時代の瓦当及びその瓦拓等の
文様・書法表現の芸術的特徴について－

東 國 恵

内 容 目 次

- 1、はじめに
- 2、瓦当の発現の時期と地域
- 3、瓦当の呼称
- 4、瓦当の部分呼称
- 5、瓦当の形と大きさ及び種別
- 6、瓦当の焼制工芸
- 7、瓦当の画像と書法表現の芸術的特徴について
 - (1)西周時代
 - (2)戦国時代
 - (3)秦時代
 - (4)漢時代
- 8、おわりに
- 9、参考文献

1、はじめに

建物の屋根に瓦を用いたのは、古代ローマなどの欧州諸国においても、すでにみられるが、その著しい発達を見たのは、中国の西周及び戦国時代にさかのぼる。しかしなんと言ってもその最盛期は漢の時代で、文様の多種多様なことは、とうてい他の追従を許さない。瓦当とは屋根瓦の軒先部分をいう。丸瓦の先端で下に垂れている部分である。その形状が上半円形のを半瓦当、円形のを円瓦当と呼んで区別している。中国では円瓦当より前に半瓦当が用いられていた。瓦当は中国古代建築の一種独特の装飾物である。主に屋根の軒を覆って保護し、風雨の浸蝕を防ぎ建築物の延命作用をした。実用の価値の他、建物に絢爛さと輝きを加え美観を強調する要素を有っている。

今までに発掘した瓦当やその写真等のすばらしさは勿論だが、その瓦拓等を通してその文様・書法表現の特徴について従来の論を自分なりに分類整理し、各時代の美意識と芸術性について述べることをとする。

2、瓦当の発現の時期と地域

中国における最古の屋根瓦の発見例は、現在のところ西周時代であり、陝西省扶風県の周原遺址や西安近くの豊鎬遺址から多く出土している。これらは弧度の小さい大型の平瓦であるが、西周中期頃からは、これに丸瓦を組み合わせて、屋根全体を瓦葺きにすることが始まったと考えられている。その丸瓦の先端に素面瓦（拓1-1）と重環紋瓦（拓2-5）の半瓦当がともに多量に発見されているので、紋有り半瓦当の起源は、西周後期頃と推定されている。

春秋時代後期から戦国時代初期にかけて、華北の各地に瓦葺きが普及し、縄紋瓦（拓6-9）や図象紋瓦（拓10-16）の半瓦当が多く発掘された。戦国時代に各地でそれぞれ特徴ある文様が好まれた。

齊の臨淄城からは、樹木や写実的な馬や鹿等の平明な図象の半瓦当が多く発見された。また燕下の都址からは、殷時代の青銅器の文様を彷彿させる獣面紋の半瓦当が多く発見され、各々お国ぶりを表現している。

戦国時代の瓦当は、ほとんどが半瓦当だが、一部円瓦当も用いられたようである。その最早は河北省平山県の王譽墓発見のもので、前四世紀末と考えられている。これらのほとんどが蘑菇形雲紋（拓61-64）蕨手紋のような図柄でほとんど文字は見あたらない。

文字瓦当の発見は、宋代の王闢之が「澠水燕談錄」の中で「秦の武公、羽陽宮を陝西省宝鶏市の鳳翔に作ったが、久しくその場所を究明できなかった。元祐六年正月直隸門の東百歩で、居民権氏があちこちから古筒瓦を五箇得たが、皆破損しており、一箇のみ全ったかった。瓦面には四字「羽陽千歳」（拓-65）の字が形にしたがって之を為し、はじめて羽陽旧址と即知した……」また、元代の李好文の「長安志図」に「漢の瓦当は古妙を形制し、工は精巧を極め、土壤は漬蝕すれども、残欠漫漶にして、之を破るに新のごとく、人にその瓦当を得る者あるは、皆古篆を作り、盤屈隠起し、以って華榮と為す、その文にいわく、長楽未央（拓-66）、漢併天下（拓-67）、蕃嬀未央、長楽無極（拓-68）……是を以って古人の制作がかりそめでなかったことが知りえる。一瓦壁といえども必ず銘識有り、特に輝く器ではないが然りと為すのみ。」と清代から現代まで、陝西省の西安、鳳翔、宝鶏、咸陽、茂陵等の地は、秦漢の古都の地で、時に瓦当の出土がある。この外に、山東省の歴城、曲阜、諸城、東萊、掖県、即墨、雛県、河南省の洛陽、新安、靈宝、河北省の懷柔、邯鄲、遼寧省の沈陽、甘肅省の天水、四川省の重慶、青海省の海安、山西省の万家、洪洞、福建省の崇安、江蘇省の贛榆、内蒙古の包頭、呼市等の各地区で、数量的にすべて同じでないが、瓦当の出土が有り、蒐集研究者による撰著・専集は十数種の多きに達している。

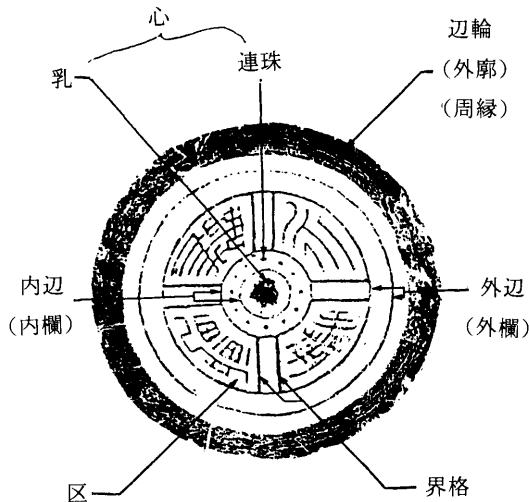
3、瓦当の呼称

瓦当の由来については諸説あるが、瓦当は瓦頭とも呼び、漢の瓦当銘中に自称の瓦に「都司空瓦」（拓-69）や「蘭池宮当」（拓-70）や「長陵東当」（拓-71）等もあるところから、連称したものであろう。「当」の意味には、清代の程敦氏の説を引くと「韓非子・外儲篇」に「玉卮無当」を「当」は底の意と解し、連続する瓦の最下部にあって、軒際の正当、衆瓦の底を覆う瓦当と説明している。また華沅之氏は「秦漢瓦当図」に璧当の意を認めており、陳直氏は斑固の「西都賦」の中で「裁金碧は飾瑯を以ってす」と瓦当の位置が正しく軒頭の上にして名を得たものである。また「当」の字は即

ち、阻挡、遮擋、抵擋の意味である。瓦当の作用が軒を覆い頭を以て用いるもので、「当」は上面瓦が滑り落ちるのを止めるためであり、また兩行間の隙間を遮り起到の固定作用をする一方建築物を美化する目的をもつものであった。以上から漢代には、瓦当また当瓦と呼ばれることもあったと考えられる。

4、瓦当の部分名称

論者により名称は異なるが、一応併記する。（図－1）小生は（ ）以外の名称で呼ぶことにする。



5、瓦当の形と大きさ及び種別

西周の瓦当はほとんどが、半円形で当面径17cm－25cmの素面と重環紋瓦当（拓1－5）である。春秋・戦国の瓦当は、縄紋・夔紋・山雲紋・鹿樹紋・双獣樹紋等の半円瓦当（拓6－16）と鹿紋・獣紋・葉紋・花卉紋・旋渦紋・旋齒雲紋・様々な雲紋等の円形瓦当（拓17－57）で当面径14cm－15cmが多く、中に18cmや19cmのものもある。秦の瓦当は夔鳳紋大半円形や夔紋円形（拓58－60）等は当面径16cm－19cmのもので、その他の多くの雲紋円形瓦当は、14－15cmでや

や小型なものが多い。漢の瓦当は四神の円形瓦当（拓72－75）をはじめ文字瓦当はほとんど円形で、18cmを基調に16cmや19cmのものも多くある。この時代の特徴は、辺輪が寛厚で中心に乳のあることである。したがって漢の武帝時期の宮殿用瓦は、その前後の時期最大であったことが窺われる。古代瓦当の種別は、画像瓦当と文字瓦当及び文字兼画像瓦当に大別することができる。

6、瓦当の焼制工芸

「史記」によると、当時の書画技工は、黄門令署に多く集められ、この技工を瓦当図案設計に参加させるのは全く容易なことだった。当時の窯業の盛は数千処に達していた。「後漢書」によると「杜陵南山下、孝武の頃故陶処に有り、磚瓦を作るに、一朝に蘇ることができ、両漢の陶業は武帝時に最盛だった。」官窯の外を除いて、中小地主の自行焼制瓦当も多くなった。

従来出土した瓦当は、文字瓦当が多数で、画像瓦当はこれに次いだが、解放後の科学発掘は沢山の画像瓦当をも発現した。これは中国の古代美術の遺産で有るとともに、焼制工芸の粋として評価できる。

7、瓦当の画像と書法上の特徴と芸術性

〈1〉、西周時代

素面半瓦が最初で、単に実用のみの紋無しだったが、次第に美意識が芽生え、重環紋半瓦当へと進

展。装飾性から言うと比較的原始で具体的表現対象はなかった。簡単な刻する道具で各種の「線の装飾図案」を彫った。その処理は、平面と下の凹んだ線の組合せで、簡朴そのもので華やかさはない。自然で純真な感覚を受けるが、芸術性はまだまだで、次へのステップとも考えられる。

〈2〉、春秋戦国時代

春秋の粗縄紋や細縄紋は、先代と変わらず非常にシンプルだが、先秦になると新興地主階級が政権を建立し、当時の七国中最先進国となった。社会の富庶が必然的に建築ブームを引き起こした。建築芸術は時代精神を反映したこともあって、例外なく瓦当も大きな発展をした。

この時の瓦当の題材は、地上の鹿や獾・空中の鳥・水中の魚や亀から植物さらに昆虫にいたるすべての紋がある。これらの制作にあたって、自然を直かに観察し取材してそれを創作へと展開したのである。この最も代表的なものが鹿紋瓦当である。（拓17-25）悠然自得として立ったままの鹿から、機敏に走る鹿、喜び戯れる鹿、寄り添っている鹿、追われている鹿、群がる鹿等作者が詳細に観察した上で、極めて装飾的に鹿の紋を図案に仕上げ、簡単明快に且つリアルに生動的芸術の瓦面に高めたことは一大飛躍である。特に瓦当を直に鑑賞することは勿論だが、瓦拓を通して鑑賞する図案の芸術性に底知れぬ雅味を覚える。とともに鋭く冴えわたった線質も同様である。

〈3〉、秦時代

秦は咸陽に都を作り渭水兩岸に広い宮殿を建て、国力の強盛を図った。秦の始皇帝が一国を滅ぼす度にその国の宮殿様式を倣建し、輝かしい六国の宮殿を建て、百四十余ヶ所に達した。その労働力たるや七十余万人で阿房宮をはじめ秦の始皇帝陵、更に兵馬俑を修建した。このごとき雄偉な宮殿群は今は亡くなったが咸陽・西安・臨潼等から出土した多量の瓦当が、当時の建物の規模や繁華さを我々に物語っている。

秦の瓦当は、大きく分類すると二つに分けられる。一つは動物の画像、もう一つは雲紋のごとき線画き図案である。それに少量の文字瓦当である。

動物の画像では、鹿・四獣・双獾・夔鳳・鴻雁・魚等の表現手法は以前と変わらないが、作者の心情が加味されたこと、また人が素直に福を求め祥を求めたことが窺われる。鹿の音読み〈禄〉、羊の音読み〈祥〉、獾の音読み〈歛〉、魚の音読み〈余〉等。さらに為政者が威力を誇示すべく神異的な夔や龍の組合せをしたり、鳳や虎等の雄偉さ力度と動勢を表現している。これらから秦帝国の国威と制作者の芸術的気魂と絶妙の構想を感じずにはおれない。

例えば、夔紋（拓-76・77・78）、夔鳳紋（拓79-83）、鳳鳥紋（拓-84）、双鳳朝陽紋（拓-85）、魚鳥紋（拓-86）、双鶴雲紋（拓-87）、鳥雲紋（拓-88）、鹿紋（拓-17・18・19）、双鹿紋（拓-89・90）、群鹿紋（拓-91）、亀・鴻・鳥・羊・鹿紋（拓-92）、鴻雁雲紋（拓-93）、四獣紋（拓-94）、双獾紋（拓-95）等。更に印象的なのは、人闘獸紋（拓-27）である。人と獣が格闘している場面を表現している。小さい人間が大きい獣を槍で一突き、獣の重要な部分を刺し大声で悲鳴を上げている構図は見事である。この表現手法は大と小、動と静、線と面、虚と実を対比しながら一瓦面の中に、変化と統一を求めた素朴ながら芸術的格調を認めざるを得ない。もう一つは、双鳳朝陽紋（拓-85）である。水面に映えた双鳳を瓦当面の上下に構図化した表現の発想が実に素晴らしい。南陽の漢代画像石の中に鏡に映した人物画が描かれているものと相通ずるところがあり興味深い。

もう一方出現瓦当の図案は雲紋である。すべてが線として帰納し、線の中に質感・量感・意情・空間・韻を求めた構図に仕上げているが、それらは円心内の図案によって、以下の四種に分けられる。

(1)、幾何心雲紋

この種の瓦当は、四つの分界にわけ、一分界に雲紋を図案化して描いた。それと同じ図案を他の分界に連続して描き、瓦当の円の中心を幾何紋形体で組織したもの。（拓55・96-104）

(2)、網心雲紋

この種の瓦当の円心は、各種の網線装飾からなり、秦人が狩猟や漁業などの生活習慣から由来し保持したものと思われる。（拓105-123）

(3)、四葉心雲紋

この種の瓦当の円心は、四つの葉が円心の中心から四方に広がって、内辺（内欄）の外側と外辺（外欄）の間四分界の各々の区に雲紋を線装飾したもの。（拓124-134）

(4)、任意心雲紋

この種の瓦当の円心は、心に従って欲するままに、秦人の活躍的創作思想を反映した任意な線装飾を施し、その外側に更に雲紋線装飾をしたもの。（拓40・135-152）

以上の瓦拓例は、限りはあるが雲の変化図案をじっくり観ると各々同一でない、その数は数百種とも言われるぐらいである。

雲紋の外には、葵紋がある。（拓46・47・49・50・52・153-160）、更に水渦紋（拓165・166）もある。しかしこれらの数量は前者に比べれば非常に少ない。

この時代の文字装飾の瓦当は、少し出現し始めるが、ほとんどが吉祥のことばでその代表的なものは、秦十二字瓦当「維天降靈、延元万年、天下康寧」（拓-167）、「羽陽千秋」（拓-168）、「羽陽千歳」（拓-65）、「羽陽万歳」（拓-169）等。これらは、当時の秦国群臣がその威列を頌したことが、瓦当の上に内容と成った。文の結構も殷周以来の詔酷文体を採用して、四字一句で言は簡でしかも意味深い。書体は小篆体を用いている。

図案と吉祥語瓦当の典型的なものは、「飛鴻延年」（拓-170）で瓦拓のように一羽の鴻雁の頭頸に「延年」の二文字を両側に振り分けている。中国の中軸線式的な対称美を上手に合わせている。雁の頸は誇張的で大変長く、瓦当の上まで真直ぐに伸び、鳴き叫んでいる状態を作っている。この画面の構成は見事である。「延年」二文字は方形で円の中に曲線、直線、弧線が巧妙に布字され、動と静を巧みに結合させ、対称の中に変化と均衡も表し、観る人をして広がりと神奇さと心理的美観を感じさせる。

〈4〉、漢時代

瓦当の紋飾は、漢代に至って最高峰に達した。劉邦の「大風歌」の「大風起き 飛雲揚り 威は海内に加わり また故郷にも 安んぞ猛士を得んや 四方を守る」からこの時代の気概を想起することができる。その中の代表的なものを上げると

(1)、四神瓦当

これらは当時の大型建築物の構図設計上から魔除けの働きを為すために、神化した動物「青龍」「朱雀」「白虎」「玄武」を東西南北の各々の建物にワンセットで配置したものである。

イ、「青龍」は四神の長で、東の方、左の方、春天を表し風を呼ぶことができる。（拓-72）

ロ、「朱雀」は人が理想化した吉鳥であって、南の方、下の方、夏天を表す。（拓-73）

ハ、「白虎」は猛威を象徴し、西の方、右の方、秋の天を表す。（拓-74）

ニ、「玄武」は亀と蛇を組合せ変化した図案で、北の方、上の方、冬天を表す。（拓-75）

この図案には一つの共通点を有っている。それは雄渾な辺輪（外廓）と瓦当面中心に乳型の釘があること、龍の鱗、朱雀の羽毛、虎の斑点、玄武の亀紋等が人に煩雑さを与えるところか返ってこの瓦当の特性を表している。これら（拓72-75）は格調や風格や布置の点から実に統一的作品であることが観察でき、漢代瓦当構図の一大発展である。

(2)、翼のある瓦当

この図案は漢瓦当中少ない精品の一つである。四つつの足を開き、高く羽ばたく翼もあり雲に騰り霧に駕し、猛きこと虎威のごとき表現である。制作者の理想を浪漫的手法で表現した作品である。（拓-171）

(3)、文字のある瓦当

これは線と点の結構図案で、漢代に入り全盛期となった。限られた円の範囲に長短案配を進め都合よい形に変化した。一字、二字、三字、四字、五字、六字、八字、十字、十二字まで変化進行している。書体上の変化も見られる。この種の文字瓦当は多姿爛漫で力があり豊満な構成と質朴醇厚な気韻を備えて、人に幽情と暢叙をあたえる。文字瓦当を整理分類すると以下のように分けられる。

イ、標示の明かな建物の名称

「長楽」「未央」「上林」等がありそれぞれ長楽宮、未央宮、上林苑内の離宮別館に用いた。（拓172-179）

a、宮殿瓦当-「甘泉上林」（拓-180）「甘林」（拓-181）「上林」（拓-182）「蘭池宮当」（拓-170）「鼎胡延寿宮」（拓-183）

b、官署瓦当-「宗正官当」（拓-184）「上林農官」（拓-185）「都司空瓦」（拓-69）

c、祠廟瓦当-「鮮神所食」（拓-186）「奉靈嘉神」（拓-187）「西廟」（写-1）「冢祠堂当」（拓-188）

ロ、標示の明かな地名の名称

「京師寓当」（拓-189）「長陵東当」（拓-71）「長陵西神」（拓-190）長陵は漢の劉邦の陵墓。今の咸陽市。

ハ、標示の明かな任務所の名称

「関」（拓-191-193）「衛」（拓194-196）「車」（拓-197）「佐弋」（拓-198）

「関」は関口門戸の建物に、「衛」は禁軍官署に、「佐弋」は水衡府の機構に用いた。

ニ、記事的標示のあるもの

「惟漢三年大併天下」（拓-199）「楽哉破胡」（拓-200）「单于和親」（拓-201）「单于天降」（拓

－202)

ホ、吉祥的標示のあるもの

「千秋万歳」（拓203－216）「永寿無窮」（拓－217・218）「永寿嘉福」これは鳥虫体の珍しいもの。（拓－219）「長楽未央」（拓220－224）「與天無極」（拓－225・226）「万歳」（拓－227－229）「延年益寿」（拓－230）「千秋万世」（拓－231－233）「長楽富貴」（拓－234）「大吉日利」（拓－235）「長生無極」（拓236－239）等この種の瓦当の数量と品種は非常に多い。

ヘ、構成形式からの分類

ア、一单元（無心無界格）外輪と一字のみ

「関」「衛」「冢」「墓」「車」「李」「金」「焦」「便」等（拓192－197・240－242）例外として（拓－243）

イ、二单元（無心）形式

〈イ〉、左右形式のもの

「千秋」「万歳」「佐弋」等（拓－198・227－229・260）

〈ロ〉、上下形式のもの

「上林」「華倉」「大富」「冢上」等（拓－177・178・182・244－246）

以上左右、上下を対称美を出しながら、筆画に繁簡それぞれ巧妙に取入れ見事な結構で纏めている。

〈ハ〉、四单元形式のもの

この形式は円瓦面を四分界し各分界毎に一字或は二字を布置したものである。この形式は漢瓦当中最も多いので省略し、各分界毎に二字のものは「千秋万歳與天無極」（拓－247）

〈ニ〉、無单元形式のもの

「與華無極」「千秋万世長楽未央昌」「千秋万歳為大年」（拓－248－252）

〈ホ〉、多单元形式のもの

「惟漢三年大併天下」「千秋利君長延年」「延寿万歳與天久長」「延年永寿長楽未央昌」等（拓－199・253－255）

〈ヘ〉、瓦当の心に文字がある形式

「鼎胡延寿宮」「長楽久哉塚」「石室朝神宮」「宜富当貴千金」等（拓－183・256－258）

〈ト〉、扁旁移動のもの

「右將」のように上下に移動処理したもの（拓－259）

8、おわりに

中国古代瓦当について述べてきたが、西周時代ではその表現が瓦面に凹んだ線で描いた半瓦当がほとんどだった。しかし戦国時代では各国で風習や趣向が異なり、燕では青銅器文様からの饗饗文、齊では樹木文、樹木双獣文、魯では動物文、秦では雲文や葵文等いずれも生長力や繁殖力を願って表現しようとしたのではないと思われる。秦統一後夔鳳文を中心に鹿や鳳や虎等を瓦面に生き生きと躍動的に描くようになった。もう一方神仙思想に傾倒した皇帝が屋根に雲文瓦当を並べて神仙の招来

を願ったとも考えられ、この雲文瓦当はおびただしいほどの数となった。その後漢の武帝も神仙に憧れて高い楼閣や宮殿を造営して、神仙の飛来してくるのを願った。漢瓦中雲文瓦当が多様なのは言うまでもない。漢代の代表的なのは四神の青龍、白虎、朱雀、玄武であり、その他鳥、蛙、蛇、魚、星等瓦面に生命力のある構図で魅せている。漢瓦のもう一つは文字瓦当である。一字、二字、三字、四字、多字数のものもあり、書体はほとんどが篆書で、中には楷書や隸書に近いものもある。語句としては、未央、長樂、上林、甘泉等の宮殿名や司空、都司、衛、関等の官庁名のものも多い。また幸せや長寿や繁栄を願った吉祥語句も多い。延年益寿、千秋万歳、長生無極等が多いが、永寿嘉福の様に鳥虫体のような珍しいものもあり、瓦面のなかを創意工夫を凝らし様々に変化の妙をつくしている。廻文にしたり、扁と旁を上下にずらしたり変化に富んでいる。これらの構図や文字の表現が非常に精巧なのは、専門の工人が世襲性であったと考えられる。漢代は通行書体は隸書であったが、貴族や知識人は篆書を正式のものと考えていた。それらの文字瓦当は権力者の要請で優れた工人達によって芸術的に作られ、当時は絢爛豪華に輝いていたと想像できる。しかし今は発掘された瓦当を直かに手にしたり、瓦拓を通して古人のロマンに触れる喜びを味わいながら、当時の工人と取り巻く環境が今と異なっても、美への憧憬や美を創造することには変わりはないことを痛感するのである。

9、参考文献

秦漢瓦当文字	程 敦
秦漢瓦当概述	陳 直
中国古代瓦当芸術	楊 力民
中国古代瓦当	華 非
半瓦当の研究	関野 雄
中国考古学研究	関野 雄
周秦漢瓦当	徐 錫台他
中国歴史博物館蔵法書大観巻3	楊 桂栄他
漢瓦当文集	伏見冲敬
齊故城瓦当	李 尧林
書品－86－秦漢瓦当文字	
墨 スペシャル21	牛丸好一
秦漢十二字瓦当散論	傅 嘉儀
秦漢瓦当	陝西省博物館
文 物	1966、11
瓦当集錦	鉄 雲
中国書法通鑑	黄 思源
瓦当の宇宙 －墨－	伊藤 滋
中国秦漢瓦当展	篆刻博物館
中国古代磚文	王 備・李 森

博鑑齋藏歴代磚瓦拓片

中国書道事典史

図解書道史

秦漢瓦当図

宗 同昌

比田井南谷

藤原楚水

華 沅之



12

8

2



13

9

3



14

10

4



15

5



16

11

6



25



21



17



26



22



18



27



23



19



28



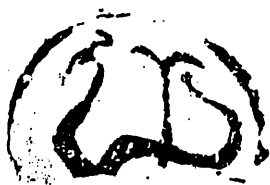
24



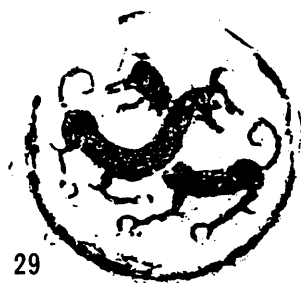
20



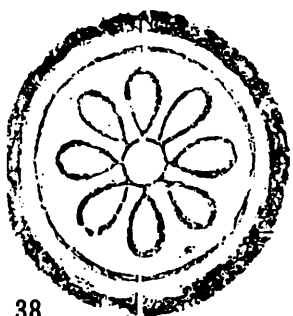
37



33



29



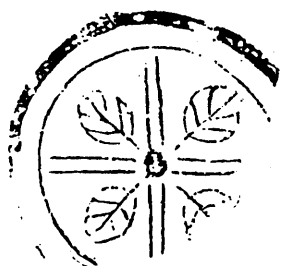
38



34



30



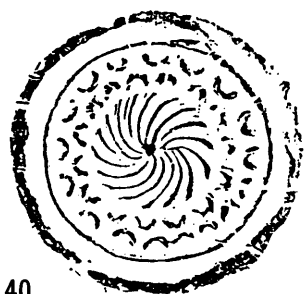
39



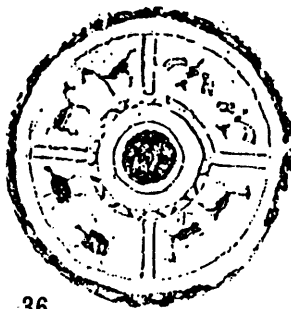
35



31



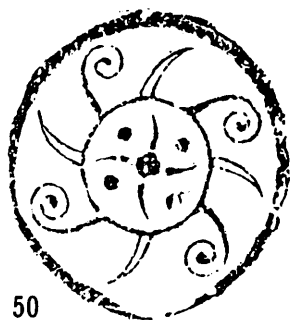
40



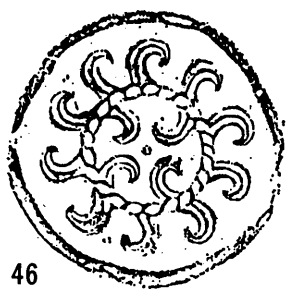
36



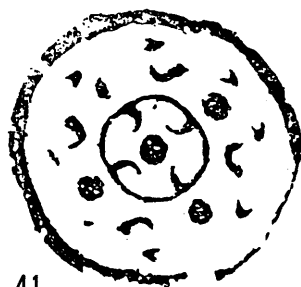
32



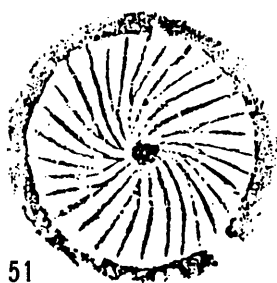
50



46



41



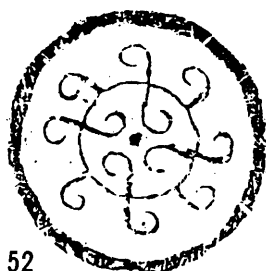
51



47



42



52



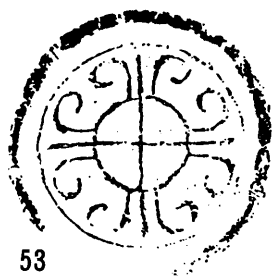
48



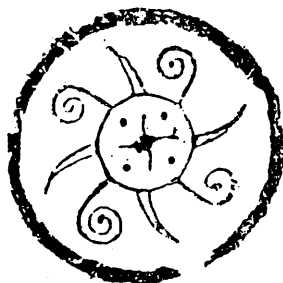
43



44



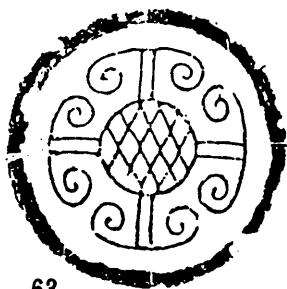
53



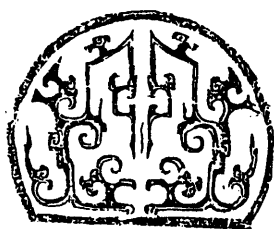
49



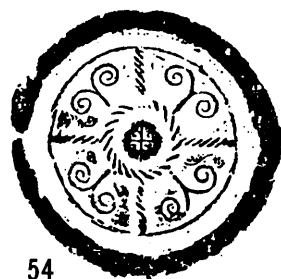
45



63



58



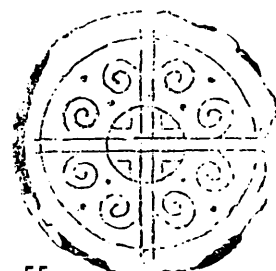
54



64



59



55



65



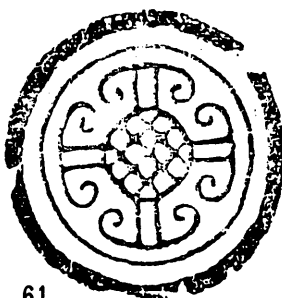
60



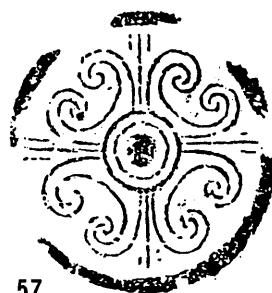
56



66



61



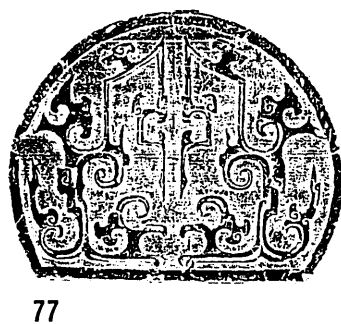
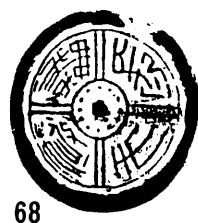
57



67

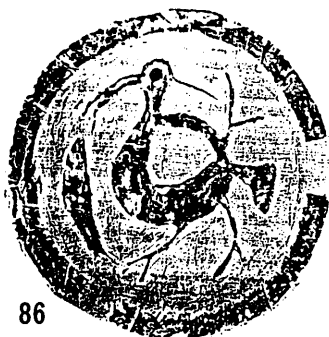


62





90



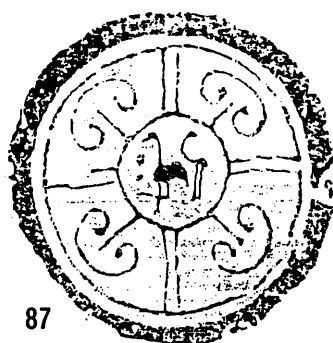
86



82



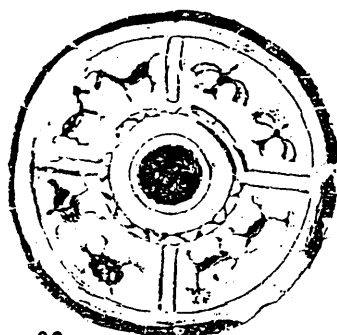
91



87



83



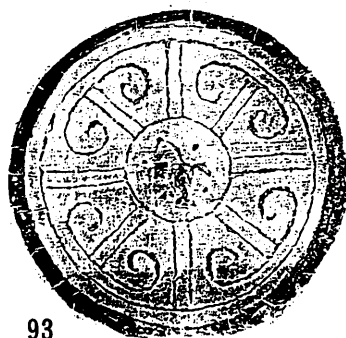
92



88



84



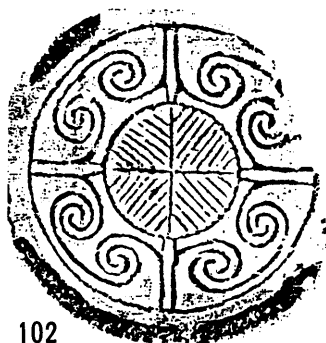
93



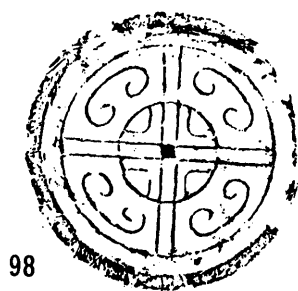
89



85



102



98



94



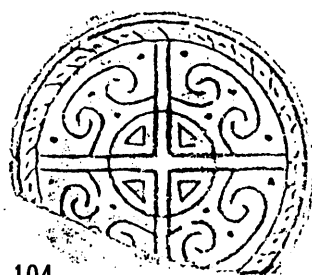
103



99



95



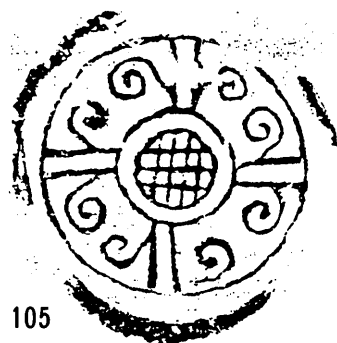
104



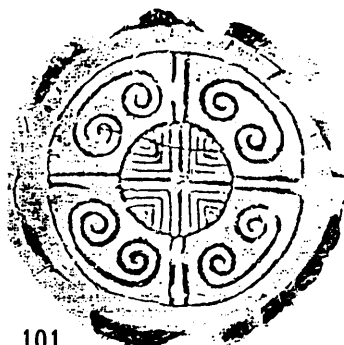
100



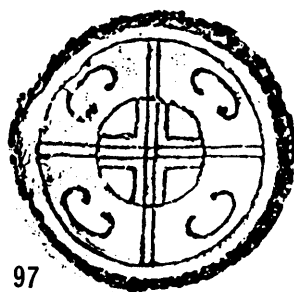
96



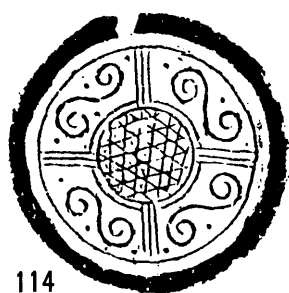
105



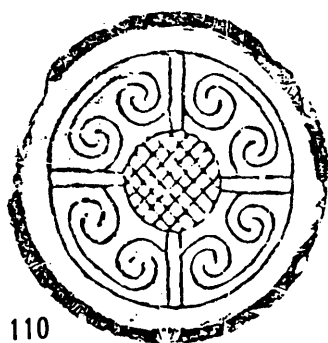
101



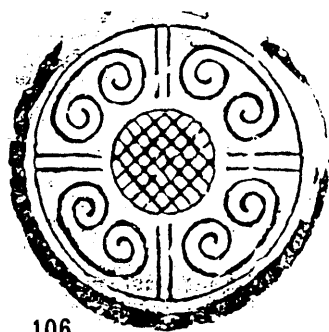
97



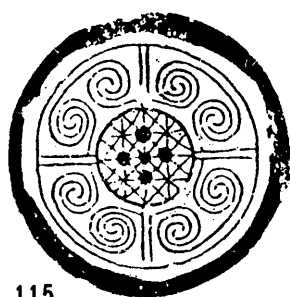
114



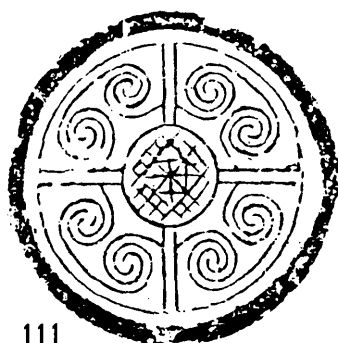
110



106



115



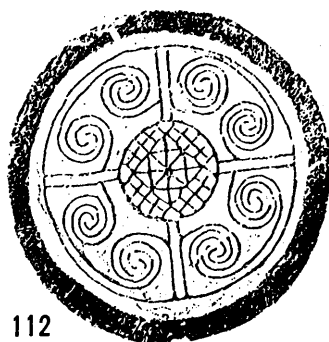
111



107



116



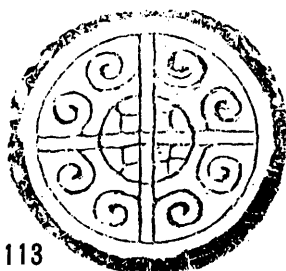
112



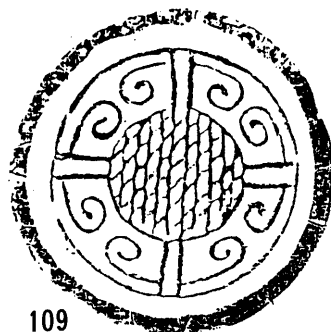
108



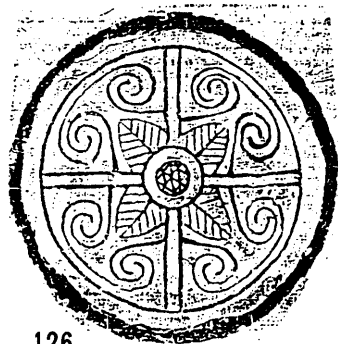
117



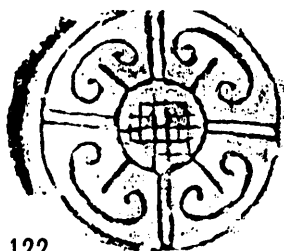
113



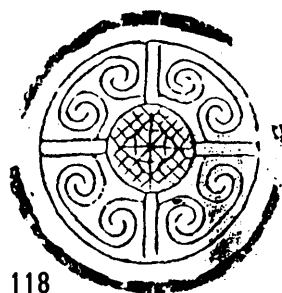
109



126



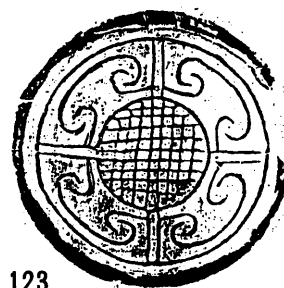
122



118



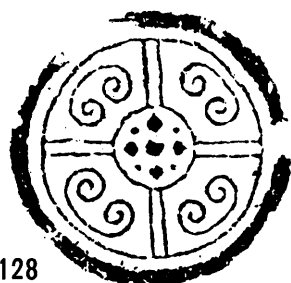
127



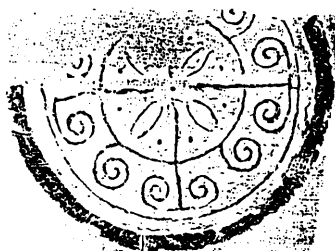
123



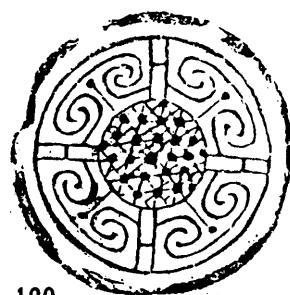
119



128



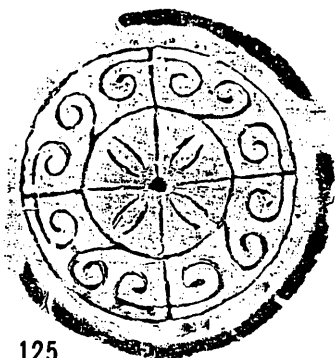
124



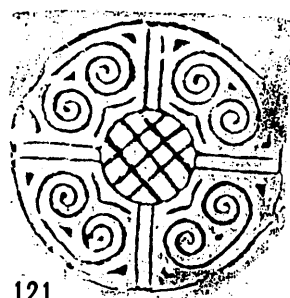
120



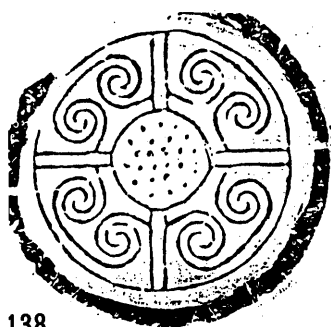
129



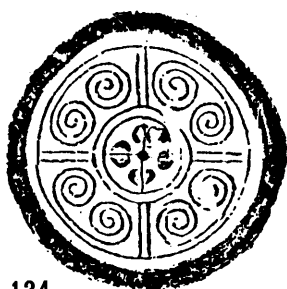
125



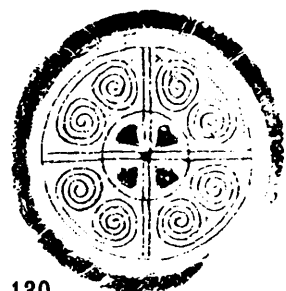
121



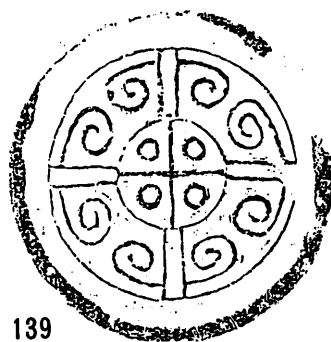
138



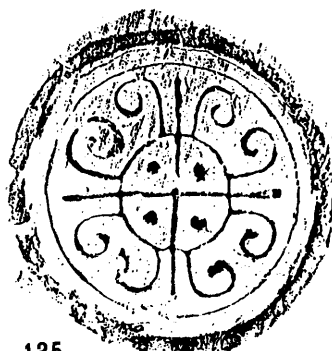
134



130



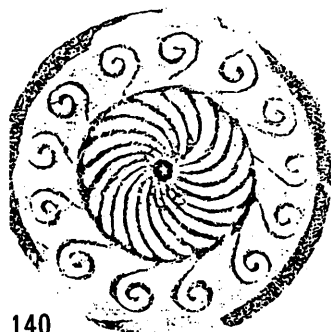
139



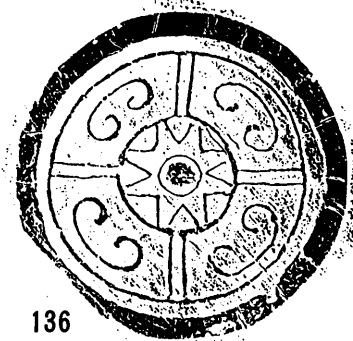
135



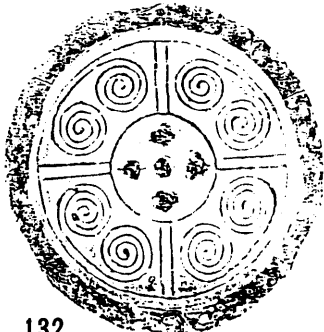
131



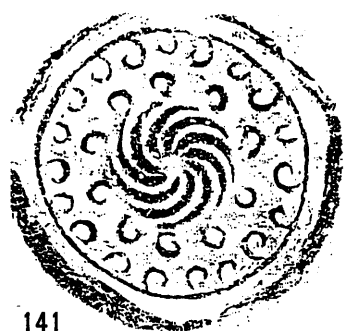
140



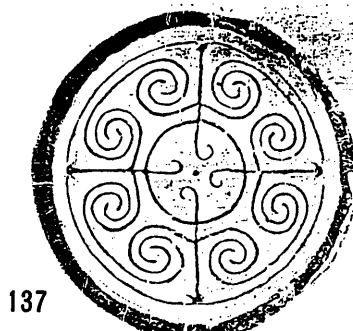
136



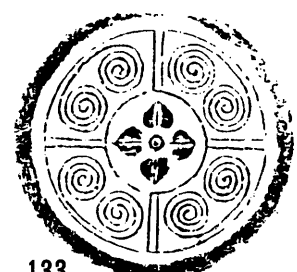
132



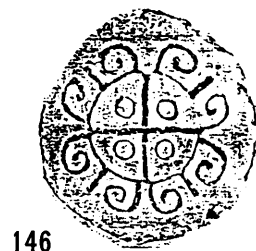
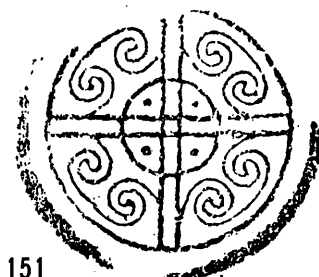
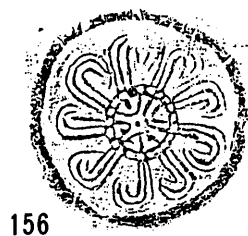
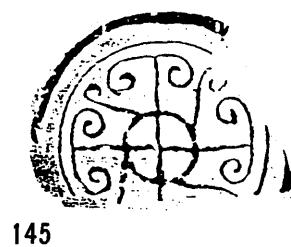
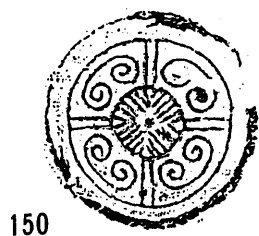
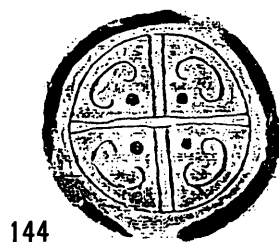
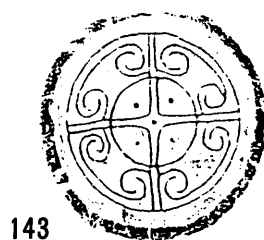
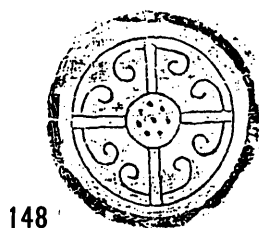
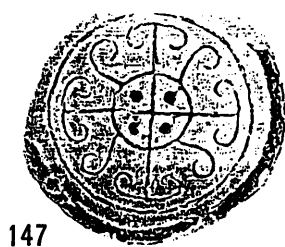
141

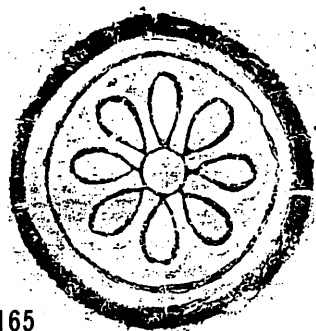


137

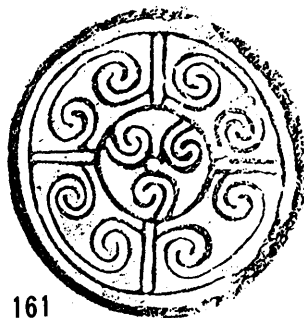


133

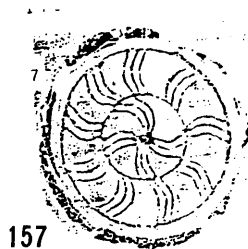




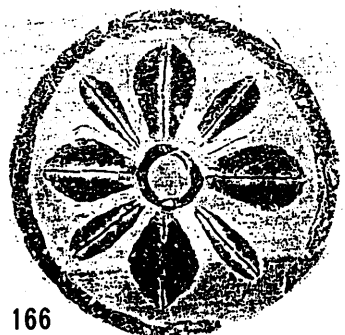
165



161



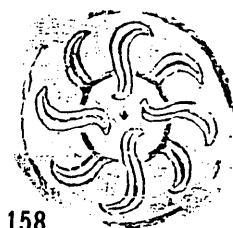
157



166



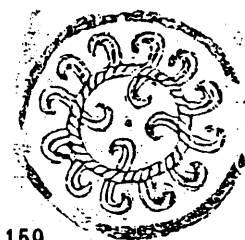
162



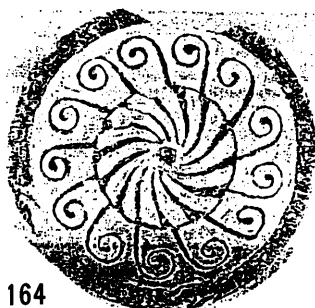
158



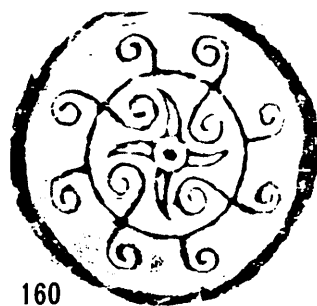
163



159



164



160



167



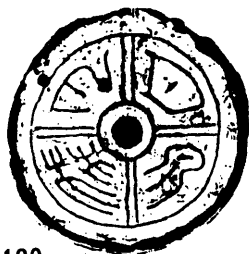
174



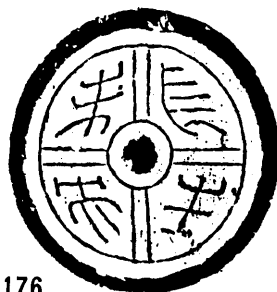
175



179



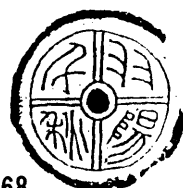
180



176



169



168



181



170



182



177



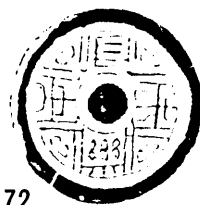
171



178



173



172



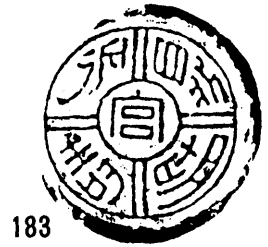
197



192



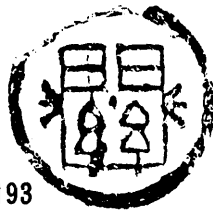
写一1



183



198



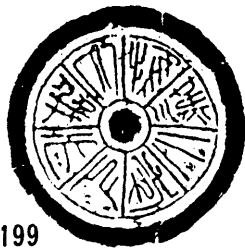
193



188



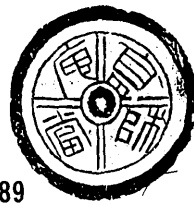
184



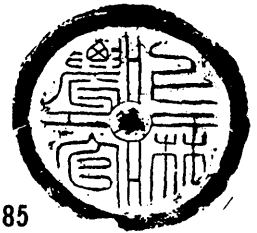
199



194



189



185



200



195



190



186



201



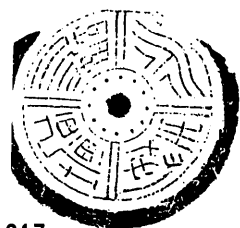
196



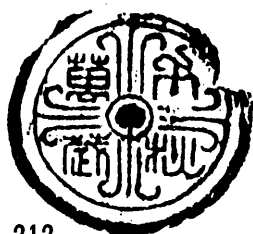
191



187



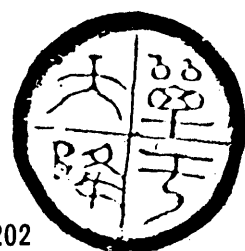
217



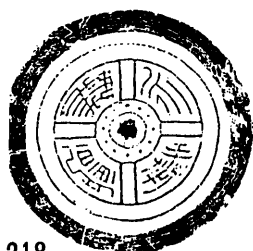
212



207



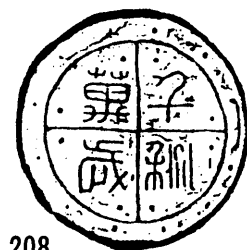
202



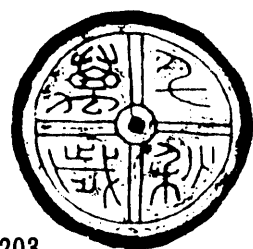
218



213



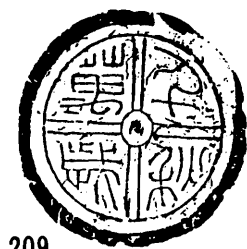
208



203



214



209



204



215



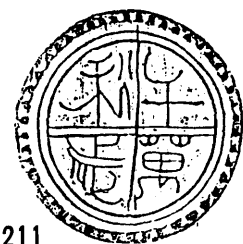
210



205



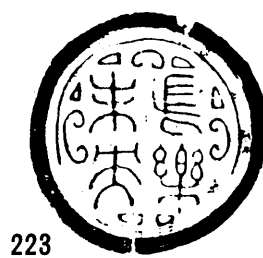
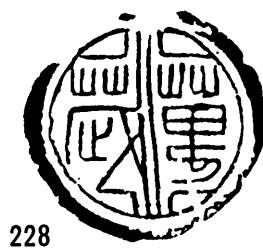
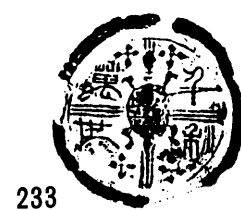
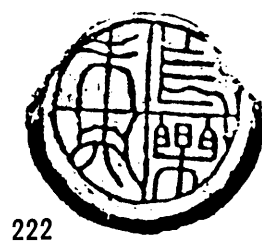
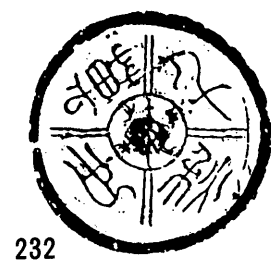
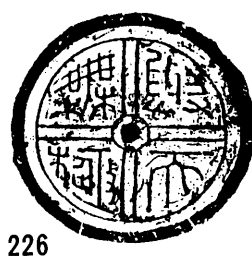
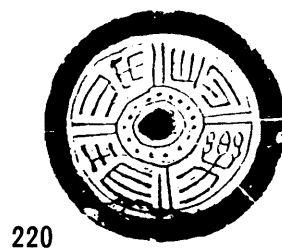
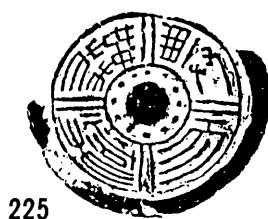
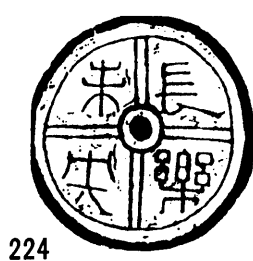
216



211



206

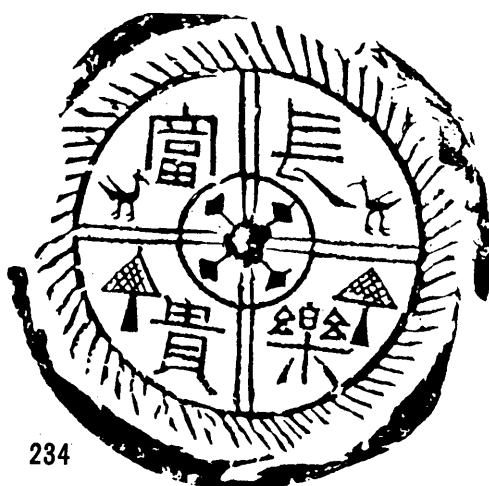




245



240



234



246



241



235



247



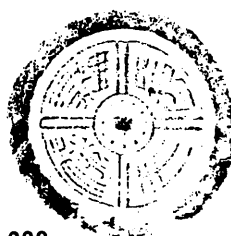
242



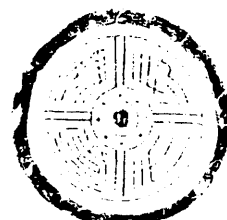
248



243



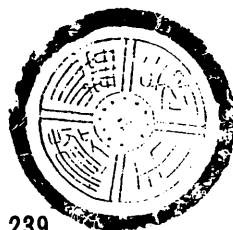
238



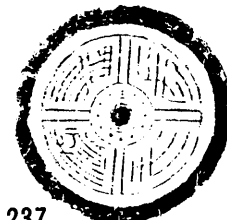
236



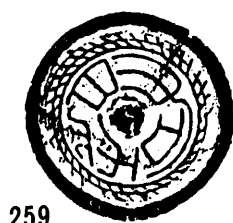
244



239



237



259



254



249



260



255



250



256



251



257



252



258



253